

教科書を使う道徳の新しい授業法

道徳読み

横山駿也 ◆ 監修

広山隆行 ◆ 編著

はじめに

「道徳読み」、初めて耳にされたことでしょうか。

それもそのはずです。

これまでにはない全く新しい道徳授業のやり方なのです。

「道徳読み」は次のパートに分かれています。

- 1 普通に読む
- 2 道徳読み（道徳さがし・道徳みつけ）をする
- 3 見つけた道徳を発表する
- 4 登場人物に通知表を付ける
- 5 自分を省みる

この5つのパートを知るだけで、誰でも主体的・対話的で深い学びのある道徳授業ができるようになります。

子どもたちは授業で考え・議論するようになります。

「道徳読み」は、教科書を使って行うのが基本です。

ですから、特別な準備がいきりません。

明日からでも、すぐにできます。

そして「道徳読み」をすればするほど、道徳的な見方・考え方が心の中に蓄積されていきます。子どもたちの変容に手ごたえを感じるはずですよ。

平成30年度から「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」になりました。

道徳の授業をどうすればいいのか悩んでいた先生。

これまで道徳の授業のやり方に戸惑い、迷いを感じていた先生。

何かを変えたい、何か違う授業方法を試したいという向上心のある先生。

「道徳読み」は、誰でもできます。

ぜひ「道徳読み」を実践してみてください。

「道徳読み」を通して心が豊かになり、子どもも先生も、親も学校も地域も幸せになるはずです。

広山隆行

I 「道徳読み」の基本……………7

① 道徳の基本的な考え方……………8

① 道徳脳で教材を読む……………8

② 心は自分から……………10

③ 第二の天性を豊かにする……………11

④ 他人には優しく。自分には？……………12

② 「道徳読み」の方法……………14

① 普通に読む（通読）……………15

② 道徳さがし・道徳みつけ……………16

③ 発表をする……………18

④ 通知表を付ける……………20

⑤ 省みる（自分の心に落とす）……………23

③ 評価（子どもに対する評価）……………25

① 「特別の教科 道徳」の評価……………25

② 「道徳読み」での評価……………	27
④ 「道徳読み」の効果……………	30
① 子どもへの効果……………	30
② 広がる目……………	31
③ 教師の教材分析力がつく……………	33

Ⅱ 「道徳読み」の実際…………… 37

① 学年別・授業実践……………	38
◎ 第一学年 「はしのうえのおおかみ」……………	40
学習指導案／授業の実際／授業を終えて	
◎ 第二学年 「七つの星」……………	51
学習指導案／授業の実際／授業を終えて	
◎ 第三学年 「ヒキガエルとロバ」……………	62
学習指導案／授業の実際／授業を終えて	
◎ 第四学年 「ブラッドレーのせい求書」……………	72
学習指導案／授業の実際／授業を終えて	

◎第五学年 「手品師」……………86

学習指導案／授業の実際／授業を終えて
◎第六学年 「ブランコ乗りとピエロ」……………97

学習指導案／授業の実際／授業を終えて
② 「道德読み」をより豊かにするために……………108

◎発展例① 「道德ってどんな勉強？」……………110
学習指導案／授業の実際

◎発展例② 読み物教材以外で「道德読み」……………120
学習指導案／授業の実際

Ⅲ ◆ 「道德読み」に困ったらQ&A……………130

コラム ● 「道德読み」と学級づくり

- ① 子どもを「観る」視点にする……………36
- ② 5分間の小さな「道德読み」……………119
- ③ 「法治」と「徳治」……………129



「道徳読み」の基本

1 道徳の基本的な考え方

① 道徳脳で教材を読む

国語や算数の勉強には先生も子どもたちも慣れ親しんでいます。したがって、算数の時間になれば、自動的に頭が算数脳になり、国語の時間になれば国語脳になっています。ごく自然に切り替えています。しかし、道徳はきちんと教えられてこなかったため、道徳の時間になっても、自動的に道徳脳になることはありません。子どもたちだけでなく先生も同様です。そのため、共に読み物教材を扱う国語と道徳の違いは、どうにも分かりにくくなっています。

簡単に道徳と国語、ついでに算数の違いをお見せします。まず、次の文章をお読みください。

花子が花を8本持っていました。

次郎は持っていません。

花子は次郎に4本あげました。

算数の文章問題のような文です。この文を読んだ後、「花子の花は何本になりましたか。」と問われれば、頭の中は「数」に注目します。この状態が「算数脳」の状態です。

次に、「次郎はどんな気持ちになりましたか。」と問われたら、先ほどまでの数はそれほど気にならなくなります。「状況」を見て次郎の心の中を推測します。「きっと、嬉しいだろう」などと思えます。このときの頭の状態が「国語脳」です。

同様に、次のように問われたら、皆さんの頭の中はどうなるでしょう。

「次郎は、もらってもよかったのでしょうか。」

この問いを聞くと、もらった花の数が4本だろうが、1本だろうが、本数は全く関係なくなりますが、また、花をくれた花子の気持ちも重要でなくなりますが、気になってくるのは、何の理由もなく物をもらって良いのかどうかです。このとき、頭の中では「倫理」に注目をしています。正しいか正しくないか。善いか悪いか。人の道を外していないか。こういう視点で文章を読んでいます。この頭が「道徳脳」です。

道徳の授業では、教材文を道徳脳で読み進めるのが基本です。

道徳の教材文も、読もうと思えば算数脳で読むことができます。数が書いてあるところに着目したり、登場人物を数えたり。しかし、それは道徳とはほど遠い内容となります。

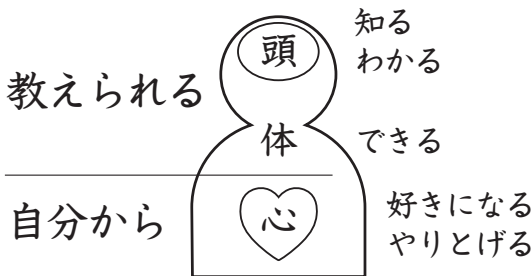
同様に、国語脳で読むこともできます。登場人物の気持ちに迫るように読み続けていけばよいのです。でも、それは国語の時間にすで行っていることです。週に1時間しかない貴重な道徳の時間に、国語脳を使わせて考えるのはもったいないことです。登場人物の言動を正邪・善悪・人の道といった道徳の視点で読んでいくのが道徳です。より良い人生を歩むために頭を使い、また、悪の道を歩まない予防として道徳を学んでいくのです。

② 心は自分から

道徳の基本的な考え方をお話しします。

まずは、人の考え方です。道徳では人を大きく3つに分けて考えます。頭・体・心です。

頭は「知る・分かる」を司ります。主に、学問としての道徳（学問道徳）を学び、考えます。体は「できる」です。主に、行儀作法に関わる所作・仕草です。心は道徳ですので「好きになる」「やり遂げる」となります。正しいことが好きになり、正しいことをやり遂げる。そういう心をつくっていきます。



頭・体・心の3つのうち、頭と体は先生が教えることができます。例えば、「物を渡す時には、相手が受け取りやすいようにしますよ。」と言い、やって見せれば、子どもたちもそのようにできます。また、なぜそうするのかと話せば、その理由も分かります。

しかしながら、心はそうはいかないことが多々あります。いやな相手に言われたら、たとえそれが正論でも、人は心の中で反発します。また、突然、隣の人を好きになりなさいと言われても、「えっ、なぜ?」「なぜ、この人を!」と心が受け付けません。自分がそう思おうとしない限り変わらないのが心です。他の人がとやかく言っても、なかなか思うようにはならないのが、人の心なのです。

論語に「仁じんを為なすは己おのれに由よりて、人ひとに由よらんや」とあるように、昔から「心は自分から」と考えられてきました。子どもたちが自分から心に働きかけるように進めるのが道徳なのです。

③ 第二の天性を豊かにする

次は、人の成長です。もちろん、道徳から見た成長です。

人は生まれた時から、両親の持っている性質などを遺伝として受け継いでいます。そのうちの道徳面に関することを、生まれつき持っている「徳性」とか、「天性」などといいます。

また、生まれてから三年ほどの期間に経験したことは人生に大きな影響を与えます。「三つ子の魂百まで」といわれるものです。

生まれてから三歳くらいまでの間に、子どもたちの中にはかなりの道徳が授けられています。簡単な善悪は分かり、して良いこと悪いことも分かるようになっていきます。でも、このままでは世の中で通用しません。学ぶべき道徳がまだまだたくさんあるからです。「お先にどうぞと譲る」「うそはつかない」「物を盗まない」などです。

これが「学問道徳」です。何度も何度も繰り返し学習をして身に付けさせていきます。繰り返していくと次第に板に付いてきます。すると、まるで生まれつきそうだったかのように感じられてきます。それが「第二の天性」であり、「習い性」といわれるものです。道徳の時間のみならず、学校教育全般で取り組んでいく道徳は、この「第二の天性」を正しく豊かになるように太らせていくことです。

④ 他人には優しく。自分には？

もう一つ、道徳の基本的な考え方を示します。

他人と一緒にいる時、普通その人には「やさしく」接します。いきなり罵声を浴びせたり、突然ぶつたりはしません。

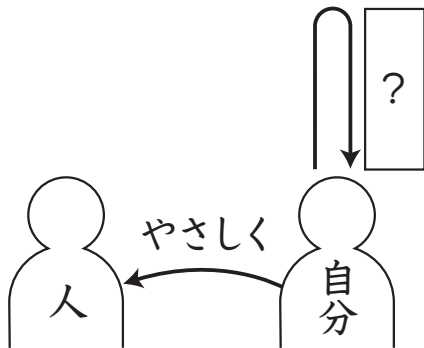


他人への接し方があるように、道德には「自分にはどうしたらよいのか」も、昔から考え方として定着しているものがあります。国語脳で考えることに慣れた人は、たいてい「厳しく」という答えが浮かんできます。

しかし、道德ではそうはなりません。「正しく」です。自分の言う言葉、自分の行動、それらが、正しさが元にあつて始まっていることが大切なのです。

詐欺師は決まって他人にやさしく接してきます。ときには、甘い話をしてきます。しかし、心の中は邪悪です。自分に対して正しさをもって向き合う。自分に正しく。こういう学習が道德です。繰り返し学べば、だます人も減ってきます。

「人の話(頭・体・心)」「徳性と学問」「他人と自分」などの話は、「学問道德」です。道德の基本的な事柄なので、「道德のそもそも論」とも言えるでしょう。とても簡単な論ですが、これを知るだけでも道德が実り多きものになります。



2 「道徳読み」の方法

「道徳読み」の授業は、大きく5つのパートに分かれています。

① 普通に読む

教科書の読み物教材を通読し全体の文意を把握します。国語の授業ではないので、難しい言葉の意味や読みそうにない漢字は調べさせずに教えます。

② 道徳さがし・道徳みつけ

「道徳読み」の最も重要な特色ある学習法です。自分で教材文から道徳を見つける学習をします。ここに道徳があるなど思ったところに線を引く。

それがどんな道徳なのか言葉で書く。

自分の中にあるほんやりとしている道徳を明確にし、自覚的にする。

③ 発表をする（他の人の見つけた道徳を学ぶ）

全体・班・グループ・隣同士などどんな形でもよい。

他の人の見つけた道徳を学ぶことで、自分の道徳を太く豊かにする。

④通知表を付ける（登場人物を俯瞰し、道徳的に判断する）

登場人物を選び、道徳の通知表を付ける。（AかCか）

人によって判断が違うことを学ぶ。

⑤省みる（自分の心に落とす）

その善いところを見て、自分もそうなりたいと思う。

その悪いところを見て、自分にもそういうところがありはしないかと思う。

①～⑤は、この順に授業をなさйтеということではありません。どれか一つを行うことでも構いませんし、②と⑤で終わることがあっても構いません。また、これまでの自分の指導法に一部取り込むことでも構いません。内容のアレンジなども工夫次第でいろいろとできます。

では、①から順に基本的な事柄を解説します。

① 普通に読む（通読）

教科書の読み物教材を通読し、全体の文意を把握します。読み方に特別な規定はありません。普通

に読めばよいのです。先生が読み上げてもよいですし、子どもたちが自分で読む形でもかまいません。難しい言葉の意味や読めそうにない漢字が出ていることもあります。それらを調べていると時間がかかってしまいます。国語の授業ではありませんので、意味や読みはどんどん教えていきます。

「道徳読み」に慣れてくると、この「普通に読む」読み方が次第にできなくなってきました。正邪、善悪、人の道を考えてしまい、読み物教材を自然と道徳脳で読み始めるようになります。この普通に読めない、道徳読みをしている自分を感じた人はとりもなおさず、道徳への頭の切り替えが自然にできるようになったということです。

② 道徳さがし・道徳みつけ

「道徳読み」の最も重要な特色ある学習法部分です。自分で教材文から道徳を見つける学習をします。子どもたちは既に何かしらの道徳を持っています。したがって、教材文を読めば、自然と湧いてくる道徳を感じたり（徳性・三つ子の魂レベル）、頭を使って見つけ出す道徳に気がついたりします（第二の天性・学問道徳）。しかしながら、それらは感覚的で不明確な状態です。そこで、それを言葉に書き表すことで明確にし、ひいては自覚的にしていくのがこの学習です。

先に、「心は自分から」と書きましたが、既に持っている道徳を使い、自分からどんどん道徳を見

つけ出すのが、この道徳さがし・道徳みつけです。自分の心から出発する授業といえます。

ここでやることは、次の2つです。

1. 「ここに道徳があるな」と思えるところに線を引く。
2. その脇に、どんな道徳か言葉で書く。

道徳の教材文には、当然のことですが、道徳が書いてあります。しかし、「正義が大事」とか「悪いことはしない」などと、道徳を示す言葉そのものは書いてありません。物語のように書くことで子どもたちに道徳に気づかせるように書いてあるのが教材文なのです。

その特徴をそのまま素直に活用し、「どんな道徳があるか」と道徳を探すようにして読みます。さらにそれを言葉にすることで道徳への自覚を高めます。これが、道徳さがしであり、道徳みつけです(狭義の「道徳読み」)です。

道徳さがしをする時は頭に二つの観点を持ちます。「正しいところはないか」と正しさを見つける正義の観点。「悪いところはないか」と悪を見つける悪退治観点です。この二つの観点を取り上げて、「善い道徳を見つけれ」「悪い道徳を見つけれ」と授業展開しても構いません。どちらにしろ子どもたちは正義の側に立って教材を読みます。

正邪、善悪、人の道などの観点で道徳を見つけ出すわけですから、子どもたちは設定された内容項

目とは関わりなく道徳を見つけられます。その範囲は幅広いため、「こんな道徳を見つけた」と喜ぶ姿も見られます。道徳さがしには、発見する喜びが伴うため、子どもたちは集中して教材文に向き合うようになります。

しかしながら、初めて取り組む時には、要領を得ないこともあります。そんなときは、先生が例示するのもよいでしょう。また、③の発表を通して、友だちの見つけた道徳から、分かってくようになります。やり方が分かれば、子どもたちは自分からどんどん道徳を探そうとします。先生に言われたから行っているのではなく、「心は自分から」の素直な状態で、正義の側に立って学習が行われるようになります。

自分で見つけた道徳は、子どもが既に知っている道徳、「既知道徳」です。道徳の授業は学習することにより、この既知道徳を増やす方向に向かいます。既知道徳が増えれば、自然と発見できる道徳も増えます。主体的に教材文に向き合えるようになります。また、言葉で書くことにより、何となくほんやりと思っていた道徳が明確になり、自覚的になっていきます。これを繰り返すうちに、どんな教材文でも自分で道徳読みを行える力を持つようになります。

なお、教材には内容項目が設定されています。自由に道徳を見つけないで、内容項目に限定して道徳を見つめる授業展開でも構いません。

③ 発表をする